

# 小学校外国語科における 児童が意欲的に学習する動機付けになるための評価

小学校外国語科研究会議

研究員 村田 暁 (川崎市立荊宿小学校) 天田 梨那 (川崎市立富士見台小学校)

佐藤 博臣 (川崎市立百合丘小学校) 坂野 幸恵 (川崎市立中野島中学校)

指導主事 竹内 茜

## I 主題設定の理由

新学習指導要領において、小学校高学年で教科としての外国語が始まる。これまでの外国語活動でも評価は行われてきたが、時間数も少なく、評価を次の指導に生かし切れていない面があった。外国語活動は「慣れ親しみ」であったが、外国語科では「定着」が求められる。その為に、目的や場面、状況等を適切に設定して、児童が主体的に「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う」言語活動を行い、伝えたいことを英語で伝えようとするコミュニケーション能力の基礎となる資質・能力を身に付けることが目標とされている。

外国語科では、「読むこと」「書くこと」も行うが、児童が自分の思考を表現するのは主に音声である。そこで、本研究は十分な言語活動を行った後、児童の学習状況を見取るために、テーマを決めたインタビューやスピーチなどのパフォーマンス評価を行い、それを児童に返すことで、評価を次の学習への意欲に結び付け、自ら資質・能力を高められるようになることを目指すものである。

研究方法として、評価の前にその観点や尺度を明確にした基準を設けて児童と共通理解したり、児童と共に振り返りを行ったりする。そのことで、児童に充実感を味わわせたり、次への見通しをもたせたりし、次の学習への動機付けにつなげることができると考える。その為のパフォーマンス評価に向けての適切な評価場面や評価方法、評価基準表（ルーブリック）の内容、効果的な振り返りの方法について研究することにした。

## II 研究の内容

### 1 研究の方法

本研究会議の研究員が担当する小学校5年生と6年生の外国語活動の授業でのパフォーマンス評価の場面に焦点を当て、検証授業を計画実施し、今後のパフォーマンス評価の参考事例を示すことにした。その際、既に取り組みされている中学校の外国語の授業でのパフォーマンス評価の場面を参考にした。

### 2 パフォーマンス評価を行うための背景となる考え方

#### (1) 現行学習指導要領における小学校外国語活動の評価について

平成23年度に始まった外国語活動では、目標や内容を踏まえて一定のまとまりをもって活動を行うことが適当であるが、「教科のような数値による評価にはなじまない」とされた。授業中のインタビューややり取りの活動では、全体的には活動している様子であっても、個別に見ていくと実は英語を使っていなかったり、間違った表現を何度も繰り返してしまっていたりということがあった。

外国語活動の授業では、授業後に作品や記録が何も残らないことがよくあるので、振り返りカードを使用することが多い。しかし、この振り返りカードも毎時間「笑顔で話せましたか」「大きな声でやり取りをしましたか」等の項目では、児童の学習状況を十分に見取ることはできず、児童の学習意欲を引き出しているとは言い難い面がある。

## (2) 新学習指導要領における小学校外国語科の評価について

平成 28 年 12 月にとりまとめられた「幼稚園、小学校、中学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」において、「小学校高学年の外国語教育を教科として位置付けるに当たり、『評定』においては、中・高等学校の外国語科と同様に、その特性及び発達の段階を踏まえながら、数値による評価を適切に行うことが求められる。」とされた。

また、同答申において、パフォーマンス評価について、「資質・能力のバランスのとれた学習評価を行っていくためには、指導と評価の一体化を図る中で、論述やレポートの作成、発表、グループでの話し合い、作品の制作等といった多様な活動に取り組みさせるパフォーマンス評価などを取り入れ、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていくことが必要である」と触れられている。

そこで、知識及び技能を目的や場面、状況に合わせて活用し、「言語活動を通して」コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力が育成されているかを見取るため、「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」では、パフォーマンス評価が取り上げられている。「パフォーマンス評価は、パフォーマンス評価用紙を使用しながら、各学年末に ALT の協力のもと行うことも考えられる。挨拶から始め、英語でのやり取りをしながら、『聞く力』『話す力』の評価を行う。評価項目は、各レッスンでのねらいと CAN-DO リストを照らし合わせ、児童の実態に合わせて作成していくとよい。その際、評価の観点を明確にし、複数の場合には評価者が評価内容・方法を共通理解しながら評価を実施する必要がある。」と述べられている。このように、場を設定して英語を使ったパフォーマンス評価を行うことで、教師は次の指導に生かし、児童は次の活動の意欲とすることができると考える。

## (3) CAN-DO リストと評価基準表（ルーブリック）について

表1 ルーブリックの例

外国語科の実際の指導に当たっては、学習指導要領に記されている抽象的な目標を学年や単元、授業の目標として掲げても、それを達成できたかどうかは児童には分かりにくい。そこで、指導者側も児童にも「できた／できなかった」がはっきりと分かる具体的な学習到達目標を指標形式（CAN-DO）で示し、その達成に向けて活動や指導を組み立てていくことが求められている。

例えば、授業の目標を「他者に配慮しながらオリジナルメニューを発表することができる」「自己紹介に関する表現や好きなこと、できることなどを発表することができる」などとすれば、児童にも「できた／できなかった」がはっきりと分かり、指導者にとっても評価が可能な目標となる。そして、目標を全員が達成できるように指導を工夫し、その過程も評価していくことで児童の学習意欲を高めることができる。

また、パフォーマンス評価を行う際には、児童の具体的な姿の例をイメージしながら、評価の観点、評価規準、評価基準を文章化してルーブリックを作成する（表1）。本研究会議では、評価基準を A・B・C の三段階で設定した。パフォーマンス評価の前に、児童にその発表で何を見るか、どんな点を評価するかをしっかりと伝えて、事前にそれらの点を意識しながら十分な練習時間を取るようにする。

観点	評価規準	A	B	C
主体的に学習に取り組む態度	他者に配慮しながら、発表することができるか。また、友達の発表に対して相づちなどをしながら聞き、感想を伝えたり、質問を進んでしたりすることができるか。	ワークシートを指さしながら、相手を見て、はっきりと伝わる声の大きさや発音でオリジナルメニューについて発表することができる。また、友達の発表を相づちをしながら聞いたり、進んで感想を伝えたり、質問をしたりすることができる。	ときおり相手を見て、はっきりと伝わる声の大きさや発音でオリジナルメニューを発表することができる。また、友達の発表をうなずく等反応しながら聞くことができる。	相手を見て、はっきりと伝わる声の大きさや発音で話すことができない。
思考・判断・表現	学習した内容を目的や場面、状況などに応じて、正しく話すことができるか。相手のことを知るという目的や場面、状況に応じて、カードにないことについても尋ねたり、相手の回答に対して自分の気持ちも伝えたりしているか。	相手のことを知るという目的や場面、状況に応じて、カードにないことについても尋ねたり、相手の回答に対して自分の気持ちも伝えたりしている。	相手のことを知るという目的や場面、状況に応じて、既習の表現を使って家族のためのオリジナルメニューを紹介している。	途中で止まってしまい、話を続けることができない。または、全く話すことができない。

#### (4) 中学校外国語科での評価について

市内の中学校では、パフォーマンステストに取り組んでいる学校が多い。ALT とのスピーキングテストやスピーチ、グループで役割を決めての劇・ロールプレイなどのパフォーマンスなどである。そのうち本研究会議の研究者が所属する中学校で取り組んでいる2つの例を紹介する。

##### ① スピーキングテスト

ALT と生徒一人で1分間話をして、教科担当がそのやり取りを見て評価する(図1)。授業内で毎時間の帯活動として1分間のチャット活動に取り組んでいるので、普段の活動に近い形でのパフォーマンステストである。ALT の質問から始まり、生徒はそれに答え、さらに相手のことを聞いたり、自分のことについて話したりする。普段の授業で、相手の言ったことを繰り返すこと (Repetition) や相手の答えに対して反応をすること (Reaction)、自分のことについてもう一つ情報を加えること (Plus 1)、さらに相手の答えをより深めるための質問をすること (Question) を意識して相手との対話が続けられるようにチャット活動に取り組ませている。そのため、最初の質問に正しく答えているか、より深い内容の対話ができているかという点を評価している。



図1 ALT とのスピーキングテストの様子

##### ②スピーチテスト

教科書の単元の内容に合わせて、クラス全員の前で英語を使って Show & Tell で自分の宝物を紹介したり、尊敬している人について発表したりしている。スピーチ活動では、伝える相手を意識させている。しかし、生徒がスピーチの原稿を作ろうとするとインターネットの翻訳機能を使ったり、辞書で調べた単語をつなげたりしてしまいがちである。生徒は、その単語をつなげただけの英文を教員に直してもらおうとするが、教員が全て添削をするのではなく、グループ内でリハーサルをして分かりにくい部分や伝わりにくい表現を生徒同士で直して本番に向かうようにさせている。グループ内で直すことによって、既習事項を用いて、より伝わる英語を選択できるようになり、皆が知らない単語は置き換えられないか、簡単に説明ができないか考えるようになる。何度も練習を重ねているので原稿を見るのではなく、相手を見てしっかりと伝えているかという点を評価している。

### 3 授業の実際

#### (1) 検証授業 1 A小学校5年 We Can! 1 Unit 3 What do you have on Monday? 関連

○単元計画 (第○時は45分授業、短○は15分の短時間学習を表す)

時	目標 (◆)	◎評価 (方法)
第1時短①、②	◆世界の同世代の子どもたちの学校生活に関するまとまりのある話を聞いて、自分達との相違点や共通点に分かる。	◎世界の同世代の子どもたちの学校生活に関するまとまりのある話を聞いて、自分達との相違点や共通点に分かり、誌面に記入している。<行動観察・記述分析・振り返りカード点検>
第2時短③、④	◆学校生活に関するまとまりのある話を聞いて、おおよその内容を捉える。	◎学校生活に関するまとまった話を聞いておおよその内容を捉えている。<行動観察・記述分析・ふり返りカード点検>
第3時短⑤、⑥	◆学校生活についてまとまった話を聞いてそのおおよその内容を捉えたり、時間割について尋ねたり答えたりして伝え合う。	◎時間割やそれについての自分の考えなどの話を聞いておおよその内容を捉え、線で結んでいる。<行動観察・記述分析・振り返りカード点検> ◎教科や夢の時間割について尋ねたり答えたりして伝え合っている。<行動観察・記述分析・ふり返りカード点検>
第4時	◆他者に配慮しながら、時間割やそれについての自分の考えなどを伝え合おうとする。	◎進んで時間割について尋ねたり答えたりしようとしている。 ◎他者に配慮しながら、教科について尋ねたり答えたりして、伝え合っている。<インタビュー・掲示作品・ふり返りカード点検>

○チャレンジタイム (パフォーマンスインタビュー) (第4時【Activity】)

<評価>

- ・新学習指導要領での「話すこと (やり取り)」の領域の「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」で行う。

※「聞くこと」の領域は、今回のメインの評価としては行わず、補助資料として確認する。

<方法>

- ・ALT と 1 分間、オリジナルの時間割や将来の夢、自分の好きなことなどを発表し、それについて会話を  
をする。

○ルーブリック（評価基準表） 【話すこと（やり取り） 思考・判断・表現】

A: 学習した内容を使って正しく話すことができる。相手の質問に正しく答えることができる。また、  
会話に関連することを ALT に質問することができる。

例) 児童: 夢の時間割の紹介

ALT: What do you want to be?

児童: I want to be a doctor. I want to help people.

(既習表現を使って extra information を追加している。)

ALT: Do you like science?

児童: Yes, I do. How about you? What subject do you like?

(会話に関連することを ALT に質問している。)

B: 間違えたりつかえたりすることもあったが、学習した内容を話すことができている。相手の質問に  
答えたり、質問したりすることができる。

C: 途中で止まってしまい、話を続けることができない。または、全く話すことができない。

○成果と課題

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1 人ずつ行うことにより、全体指導では見取ることができない評価を行うことができた。普段積極的に英語を使って発言をしない児童も、教師が予想していた以上に会話をすることができていた。</li> <li>・ ALT と 1 分間英語で会話をすることができたことに達成感を感じ、次のチャレンジタイムに向けての課題をもてた児童が多数いた。</li> <li>・ 児童が会話を楽しむ様子が見られた。英語を使ってコミュニケーションをとる喜びを感じていた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 会話の内容に関連付けた質問をしたり、それについて話をしたりすることは難しいことを実感した。普段から会話を広げる取り組みに慣れていきたい。</li> <li>・ ALT からの質問を理解できず、だまってしまう子もいた。緊張から言葉が出ない子も数名いたので、回数を重ねると慣れていくように感じられた。</li> <li>・ 文法の間違いやアイコンクト、リアクションに課題を感じた。日々の授業で意識する必要があると感じた。</li> </ul>

## (2) 検証授業 2 B 小学校 6 年生 We Can! 2 Unit 1 This is ME! 関連

○単元計画 (第○時は 45 分授業、短○は 15 分の短時間学習を表す)

時	目標 (◆)	◎評価 (方法)
第 1 時 短①、②	◆好きな動物などについて、聞いたり言ったりする。	◎好きな動物などについて、聞いたり言ったりしている。 <行動観察・ふり返りカード>
第 2 時 短③、④	◆自己紹介を聞いて自己紹介の概要を捉えるとともに、好きな教科について、聞いたり言ったりして自己紹介をする。	◎自己紹介を聞いて自己紹介の概要を捉えるとともに、好きな教科について、聞いたり言ったりして自己紹介している。 <行動観察・ふり返りカード>
第 3 時 短⑤、⑥	◆自分のできることを伝え合う。 ◆自己紹介例文を参考にし、自己紹介の内容を考える。	◎自分のできることを伝え合っている。 ◎自己紹介例文を参考にし、自己紹介の内容を考えている。 <行動観察・ふり返りカード>
第 4 時	◆作成したカードをもとに自己紹介をする。 ◆英語での表記の仕方に気付く。	◎作成したカードをもとに自己紹介をしている。 ◎英語での表記の仕方に気付いている。 <行動観察・ふり返りカード・ワークシート・ビデオ確認>

○パフォーマンステスト (第 4 時)

<評価>

- ・新学習指導要領での「話すこと (発表)」の領域の「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」で行う。

<方法>

- ・ 40 人を 2 つのグループに分け、一人ずつ前に出て発表する。担任と ALT は、それぞれのグループにつく。担任は児童の発表を聞き、その場で評価する。ALT が担当するグループはビデオで撮影し、後で映像を見て、担任が評価する。



○ルーブリック（評価基準表） 【話すこと（発表） 思考・判断・表現】

A：自分の好きなものやできることなど、理由をつなげてスピーチをしている。

児童：Hello. My name is ~. I'm from Kawasaki. My birthday is August 12. I like arts and crafts. I can play badminton. I like cats very much. I have one cat. I want to be a vet. I want to help animals. Thank you. ( \_\_\_部分は、既習表現を使って追加している。)

B：自分の好きなものやできることなどのスピーチをしている。

C：自分の好きなことやできることなどのスピーチができない。

○成果と課題

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"> <li>・評価を児童と共有することで目指すべき姿を理解できた。</li> <li>・既習の表現を活用しながら発表を行うことができた。</li> <li>・みんなの前で発表するということで、緊張感をもてた。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・カードを見てしまう児童が多かった。</li> <li>・発表をつなげるのが難しい児童が多かった。</li> <li>・質問や感想を英語でやり取りできるようにしていく必要がある。</li> </ul>

### (3) 検証授業3 C小学校5年生 We Can! 1 Unit 8 What would you like? 関連

○単元計画 (第○時は45分授業、短○は15分の短時間学習を表す)

時	目標(◆)	◎評価(方法)
第1時 短①、②	◆英語にも欲しいものを丁寧に尋ねたり言ったりする表現があることに気付く。	◎英語にも欲しいものを丁寧に尋ねたり言ったりする表現があることに気付いている。<行動観察・ふり返りカード>
第2時 短③～⑤	◆丁寧に欲しいものを尋ねたり答えたりする表現やオリジナルメニューを紹介する表現に慣れ親しむ。	◎丁寧に欲しいものを尋ねたり答えたりする表現やオリジナルメニューを紹介する表現に慣れ親しんでいる。<行動観察・ふり返りカード>
第3時 短⑦～⑨	◆家族のためのオリジナルメニューを紹介する表現に慣れ親しむ。	◎家族のためのオリジナルメニューを紹介する表現に慣れ親しんでいる。<行動観察・ワークシート・ふり返りカード>
第4時	◆他者に配慮しながら、オリジナルメニューの紹介をし、感想を伝え合う。	◎他者に配慮しながら、オリジナルメニューの紹介をし、感想を伝え合っている。<行動観察・ふり返りカード・ワークシート・ビデオ確認>

○パフォーマンステスト(第4時)

<評価>

- ・新学習指導要領での、「話すこと(やり取り)」の領域の「思考・判断・表現」と「主体的に学習に取り組む態度」で行う。
- ・紹介する役の児童の評価を行う。
- ※「聞くこと」は、今回のメインの評価としては行わず、補助資料として確認する。

<方法>

- ・4人程度のグループになり、家族のためのオリジナルメニュー紹介のやり取りを行う。1人は紹介する役、2人は紹介を聞いて質問に答える役、残りの1人はやり取りの様子をタブレットの動画機能を使って撮影する役。やり取りが終わったら撮った動画を見ながら、やり取りの振り返りを行う。

○ルーブリック（評価基準表）【話すこと（やり取り） 思考・判断・表現】

A：相手のことを知るといった目的や場面、状況に応じて、カードにないことについても尋ねたり、相手の回答に対して自分の気持ちも伝えたりしている。

例) 紹介する役の児童：オリジナルメニューの紹介 Do you like curry and rice?  
 質問に答える役の児童：Yes, I do. I like curry and rice.  
 紹介する役の：Me, too. I like curry and rice. I like spicy food.  
 (既習表現を使って **extra information** を追加している。)

B：相手のことを知るといった目的や場面、状況に応じて、既習の表現を使って家族のためのオリジナルメニューを紹介しようとしている。

C：途中で止まってしまう、話を続けることができない。または、全く話すことができない。

## ○成果と課題

成果	課題
<ul style="list-style-type: none"><li>・評価を児童と共有することで、目指すべき姿を理解し、既習の表現を活用しながら工夫してやり取りを行うことができた。</li><li>・動画を撮ることで、児童が見直すことができ、次の発表に生かせたり、友達の良いところを真似たりできる。</li></ul>	<ul style="list-style-type: none"><li>・質問をしたり、感想を伝えたりするなどの extra information は、まだ難しい児童がいるので、継続して慣れ親しませていきたい。</li><li>・Small Talk を継続して行い、既習の表現に十分に慣れ親しませ、使える表現や語彙を増やしていく。</li></ul>

## Ⅲ 研究のまとめ

### 1 研究の成果

本研究では、今後の小学校外国語科におけるパフォーマンス評価について、授業実践を通して探った。これまでの外国語活動では、それぞれの児童の活動を取り出して様子を見取することは少なかったため、担任にとってはもちろん、児童にとっても新しい発見をすることができた。

担任にとって、授業中の行動観察だけでは限りがあるが、パフォーマンス評価では個別に学習状況を見取ることができる。そして、クラス全体に不足していることがあれば、次時以降の指導を改善する。個別に支援が必要であれば、個々に重点的に指導する。これらを繰り返すことにより、児童の資質・能力の向上につなげることができる。

また、これまでの外国語活動では、児童一人だけが英語を話す場面は少なかったため、初めて取り組む活動に緊張したり、普段と同じように取り組むことができなかつたりした様子の児童も見られた。しかし、ALT と一対一で話す状況は、児童が「やってみたい」と思える活動であり、ルーブリックを設定し、共有してからパフォーマンス評価をすることは、児童にとっても目指す姿がはっきりとして、挑戦してみようという気持ちになっている様子がうかがえた。たとえ、初めての取組ではうまくできなくても、回を重ねるごとに慣れてきて、意欲的に学習する動機付けになっていた。

### 2 今後の課題

今回、ルーブリックを事前に設定して担任と児童の共通理解の下、パフォーマンス評価に取り組んでみたが、ルーブリックの言葉が具体的に児童のどのような姿なのかを判断するのはなかなか難しかった。評価基準が設定されていても、担任により少しずつ評価が異なってしまうことがあった。中学校で行われているパフォーマンス評価を参考にしながら、担任一同で、児童がパフォーマンスしている動画を見て評価の力量を高める等、小中連携しながら研修をしていく必要性を感じた。

そして、特に「話すこと [やり取り]」のパフォーマンス評価をする際には、児童が話したことに反応しなくてはならない。ALT と共通理解を図る必要性があり、担任も多少なりとも英語力を求められる。既習であったり、児童が理解できる程度の英語に調節したりして返すことになる。高度ではないが、ある程度の英語力を身に付けておく必要性も感じた。

最後に、本研究を進めるに当たり、適切なお助言をいただいた先生方、研究をご支援いただいた研究員所属校の校長先生をはじめ、教職員の皆様に心から感謝を申し上げます。

### 【参考文献】

- 文部科学省『小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック』 2017年  
樋口忠彦・ほか『Q&A 小学英語指導法辞典－現場の悩み 112 に答える』教育出版 2017年  
樋口忠彦・ほか『Q&A 中学英語指導法辞典－現場の悩み 152 に答える』教育出版 2015年